

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
志摩市	志摩市立神明小学校	230人

※ 児童生徒数については、今年度、協力校に在籍する児童生徒数を記述する。

## ○ 実践研究の内容

### 1. 推進地域における取組

#### (1) 県教育委員会事務局指導主事等による学校訪問の実施

- ① 学校の課題や今後の取組内容を聞きとるとともに、訪問校の分析結果と改善方策を提示
- ② 授業を参観し、授業者等への指導・助言

#### (2) 授業改善に向けた取組

- ① 「めあての提示」と「振り返る活動」の効果的な実施に向けた支援
- ② 「校長の授業の見回り」の効果的な実施に向けた支援
- ③ 国の調査官を招へいした授業改善研修会の実施
  - ・ 子どもたちの実態に応じた習熟度別やTTなど、効果的な少人数指導についての授業公開を伴う実践的な研修会を、国の調査官を招へいして県内9会場で実施

#### (3) 3点セットの活用

- ① みえスタディ・チェックの実施（4月、1月）
- ② 全国学力・学習状況調査の自校採点研修会の実施（4月）
- ③ 調査結果の分析から明らかになった課題に対応したワークシートを提供（9月、1月）
- ④ ワークシートをすぐ使える形にまとめたワークシート集「三重の学-Viva!!セット」を提供（6月、12月）
- ⑤ 「授業改善サイクル支援ネット」を活用した早期からの授業改善を促進

#### (4) 家庭学習の支援

- ・ 子どもたちが家庭学習に自主的に取り組めるよう、自分の力で解けるヒントを掲載したワークシート集「宿題用学-Viva!!セット」を提供（10月）

#### (5) 経年的な課題を克服するための取組

- ・経年的な課題である「割合」「図形」（算数・数学）を克服できるよう、学習内容における各学年の系統性や子どもをつまづきに対応した指導のポイントを示した資料を配付（12月：「平成29年度全国学力・学習状況調査結果 分析報告書」に掲載）

#### (6) 家庭・地域への情報発信

- ①生活習慣・読書習慣等の確立に向けたチェックシートの取組の推進（年3回）
- ②学校・家庭・地域それぞれの役割に応じた取組を呼びかけるチラシの配付（11月）

#### (7) 成果報告に向けた取組

- ①成果報告会の開催（2月）
- ②実践事例集の作成・配付（2月）

### 2. 推進地区における取組

#### (1) 学習支援サポーターの効果的な活用に向けた取組

- ①夏季校内研修会（5年生算数科教材解釈会 高学年部会）における指導・助言  
三重県教育委員会事務局学力向上アドバイザーを招へいし、学習支援サポーターや少人数加配教員による複数体制での算数の授業について、指導効果をあげるための研修を行い、指導・助言を受けた。
- ②提案授業指導案検討会（5年算数科「単量あたりの大きさ『比べ方を考えよう（1）』」）における市教育委員会指導主事による指導・助言
- ③提案授業（5年算数科「単量あたりの大きさ『比べ方を考えよう（1）』」）における市教育委員会指導主事による指導・助言

#### (2) 志摩市学力向上検討委員会の開催

志摩市の子どもたちの学力および学習状況を把握・分析し、学力向上のために具体策を検討することを目指して本年度も年間4回開催した。

#### (3) 授業研究指定校事業

志摩市では、授業において知識・技能を活用できる力を育成する指導力を身につけることを目指して、授業を中心とした実践的な研修を進めている。学校を指定し、2年間という期間を設けて一定の研究に取り組み、その成果を発表するものである。

### 3. 協力校における取組

#### (1) 児童の実態把握について

新しい単元を学習する前に、レディネステストやアンケートを実施することで、個々の児童の理解の状況や関心・意欲を把握している。授業では、めあての提示とめあてに対する振り返りを行うことで、毎時間のめあてに対する児童の理解度や満足度の把握に努めている。また、単元の終わりや学期末にテストを行い、その誤答分析から個々の児童の各単元における習熟度や課題を把握している。

## (2) 指導について

4・5年生の算数科の授業に学習支援サポーター（週3時間）を配置した。また、学習支援サポーターとは別に少人数加配教員（週5時間）も配置することで、算数の時間は、週2時間を3人体制で、残りの週3時間を2人体制で行い、個々の児童の習熟度や課題に対応した学習支援を行っている。

## (3) 補充的な学習、発展的な学習について

朝の学習（週3回）の10分間に、全学年で2学年前からの既習事項の学び直しや反復練習を行う等、補充的な学習を行っている。

また、発展的な学習の一つとして、三重県教育委員会が全国学力・学習状況調査結果から明らかになった課題に対応して作成したワークシート集「三重の学-Viva!!セット」を活用している。

## (4) 評価について

ノートの点検や練習問題の解答状況の把握を確実に言い、毎時間行う振り返りから、児童の満足度、学習内容の定着状況、学習意欲等を把握している。また、休み時間等も使いながら担当者間の連携をできるだけ多く行い、指導方法や評価内容を共有している。

# ○ 実践研究の成果

## 1. 協力校における取組の成果

- (1) 日常の授業における児童の観察（学習態度・発表・ノートなど）をもとに、児童の理解状況を記録した。その記録とレディネステストやアンケートの結果をもとに、単元の途中でも児童の実態に応じて補充学習を取り入れることで、児童の学習内容に対する理解をさらに深めることができた。
- (2) 複数体制（担任、学習支援サポーター、少人数加配教員）で指導にあたることで、児童のつまずきや間違いやすい傾向を早期に把握できた。また、毎時間のめあてに対する個々の理解度や満足度を把握したり、単元の終わりや学期末にペーパーテストを行い、個々の習熟度や課題を把握したりすることで、児童一人ひとりに応じた学習支援を行った。複数体制にあたることで、授業中、児童から出される様々な質問や、つまずきが見られる児童に対して、速やか且つ細やかに対応できた。これらの取組が、児童が安心して授業に取り組める環境づくりにつながるとともに、学習意欲の向上や学力の定着にも結びついていると考えられる。
- (3) 少人数加配教員や学習支援サポーターを活用し、授業中の役割分担（全体指導、児童の把握等）を工夫したことで、TT指導や習熟度別指導を充実させることができた。また、習熟度別にグループを分けるときには、児童自身が所属グループを決める形にしたことで、意欲的に学習に取り組む児童が増えてきた。
- (4) 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックの自校採点を全教職員ですることにより、児童の成果と課題を学校全体で把握するとともに、自校の強み、弱みについても校内研

修で交流し、学校としての課題を把握することができた。また、「三重の学-Viva!!セット」を授業や宿題で活用し繰り返し反復練習をしたことで、課題である文章問題や計算の工夫、条件に合わせて指定された文字数で答える問題等については、問題の意図について理解し、より短い時間で解答できるようになってきた。

- (5) 全国学力・学習状況調査の結果を、平成28年度と平成29年度の平均正答率で比較してみると、算数Aにおいて11.6ポイントアップし全国の平均正答率を上回った。算数Bにおいても7.0ポイントアップした。また、児童質問紙調査において「算数の勉強は好きだ」の質問に対して肯定的に回答した児童の割合が3.5ポイントアップし、「算数の授業の内容はよく分かる」の質問では12.0ポイントアップして95%を越えている。この結果からも、個々の児童の課題に対応した効果的な学習支援サポーターの活用が、児童の学力の定着や学習意欲の向上に結びついていると考えられる。

**【協力校における、全国学力・学習状況調査（算数A・B）の結果】**

＜平均正答率（％）＞

		平成28年度	平成29年度
算数A	協力校	69.6	81.2
	全国	77.6	78.6
	全国との差	-8.0	+2.6
算数B	協力校	37.2	44.2
	全国	47.2	45.9
	全国との差	-10.0	-1.7

**2. 実践研究全体の成果**

- (1) 県教育委員会事務局指導主事等による学力定着に課題を抱える小中学校への学校訪問の実施や、国の調査官を招へいした「授業改善研修会」等の開催により、「目標（めあて・ねらい）の提示」、「振り返る活動」を位置付けた授業の質の充実を図った。協力校においては、めあての一部を意図的に伏せて提示したり、教室の前面に振り返りを書くときに気をつけることを掲示したりする等の工夫がなされた。
- (2) 小中学校教職員を対象とした全国学力・学習状況調査の「自校採点研修会（4月、4地域）」の開催や、調査結果の分析から明らかになった課題に対応したワークシートの提供を通して、3点セット（全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェック、ワークシート）の活用がさらに進み、組織的・継続的な早期からの授業改善のPDCAサイクルの確立が一層推進された。また、ワークシートの活用促進により、児童生徒一人ひとりの課題の改善を図り「わかった」「できた」等の達成感に結びつけ、学習意欲の向上につなげることができている。
- (3) みえスタディ・チェックを実施し、自校採点結果を集計支援ツールに入力することでリアルタイムに設問分析を行い、課題を把握して授業改善につなげる取組が進んだ。協力校にお

いては、みえスタディ・チェックや全国学力・学習状況調査の自校採点を全教職員で行うことにより、児童の成果と課題を学校全体で把握するとともに、課題の解決にむけた指導方法の工夫や改善を行い、その成果についても定量的に検証を行った。

### 3. 取組の成果の普及

#### (1) 合同成果発表会の開催

平成29年度「わかる授業」促進事業及び平成29年度「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究」合同成果発表会を開催し、当事業の推進地区志摩市及び協力校神明小学校の取組を発表・共有し、普及を図った。

#### (2) 取組資料の配付

平成29年度「わかる授業」促進事業及び平成29年度「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究」合同成果発表会において、当事業の推進地区志摩市及び協力校神明小学校の取組資料を配付した。

#### (3) 実践事例集の配付

「平成29年度 学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）実践事例集」を作成し、県内公立小中学校及び関係機関等への配付を行い、取組成果の普及を図った。

## ○ 今後の課題

#### (1) 経年的な課題を克服するための取組

経年的に課題がみられる「割合」「図形」について、教員一人ひとりが指導のポイントを押さえた授業を展開し、第1学年から各学年の学習内容を子どもたちが確実に習得できるよう、組織的・継続的な授業改善に取り組む。

#### (2) 生活習慣等の確立

県PTA連合会と連携し、生活習慣・読書習慣チェックシートを活用した県内一斉の集中取組や、生活習慣等の定着が見られる学校の取組を県内各小中学校に紹介し、生活習慣等の確立に取り組む。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

推進地区名	志摩市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

全国学力・学習状況調査（以下、全国学調）から明らかになった本市の学力に関する課題は、「知識・技能を活用する力が弱い」ということである。具体的には、全国学調の国語、算数・数学とも、B問題の記述式問題について、全国平均と比べると正答率が低く、無解答率が高い傾向にある。そこで、「知識・技能を活用する力を育成する授業づくり」を研究課題とし、子どもたちが主体的に学びに向かい、学ぶ楽しさを実感できるような授業を構築することを通して、協力校とともに研究課題にせまっていくことにした。

2. 研究課題への取組状況

(1) 協力校の取組状況

これまでの国語科の研究をさらに充実させることを中心とし、算数科については、学習支援サポーター等との連携により、昨年度に引き続き個に応じたきめ細かな指導や支援を行っていくことで学力の定着を図っていくことにした。

算数科における具体的な取組は以下のとおりである。

①児童の実態把握について

- ・単元に入る前に、レディネステストやアンケートを実施し、個々の理解の状況や情意面を把握する。
- ・日常の授業における児童の観察（学習態度・発表・ノート等）を大切に、記録する。
- ・毎時間のめあてに対する個々の理解度や満足度を知る。
- ・単元末や学期末にペーパーテストを行い、個々の習熟や課題を把握する。
- ・学期末ごとに算数に関するアンケートを行い、児童の変容を知る。
- ・単元テスト等の誤答分析を行う。

②指導の工夫について

- ・4、5年生の算数科の授業において学習支援サポーターを週3時間配置する。また少人数加配教員も配置し、週2時間は3人体制で、週3時間は2人体制で算数の授業を行う。
- ・児童の算数科における実態把握の一助とするために、学習支援サポーター、少人数加配教員、担任の3名で家庭学習の確認を行う。
- ・視覚的支援の充実を図る。

- ・みえスタディ・チェック等の分析から明らかとなった課題のある領域・設問等については、童の確かな理解と定着に結びつけるため、授業、補充学習、家庭学習で繰り返し学習を行っていく。
- ・子どもたちの豊かな発想や考える力を大切に、子どもたち同士が試行錯誤しながら共に学ぶ学習過程やペアやグループでの話し合い活動を充実させる。
- ・自分の考えを書いてまとめる活動に慣れさせ、書く力を高めるためにノート指導を充実させる。

#### ③ 補充的な学習、発展的な学習について

- ・全国学調、みえスタディ・チェック、ワークシートの3点セットを、年間を通して授業や朝の学習、家庭学習において計画的に活用し、課題となっている「発展的な学習」「内容を整理してまとめて書いたりする力の向上」の充実を図っていく。
- ・つまずきのある児童の学習集団においては、必要に応じて、前学年までの既習事項の学び直しや反復練習等による補充的な指導を行う。
- ・更に学習を進めていきたい児童には、発展的な課題を用意して学習意欲を高めるような支援を行う。

#### ④ 評価について

- ・毎時間の振り返りから、児童の満足度、学習内容の定着状況、学習意欲等を把握し指導方法を検証する。
- ・評価内容を共有し、指導改善を行うため、担当者間の連携を密にする。

## (2) 推進地区の取組状況

### ① 夏季校内研修会（5年生算数科教材解釈会 高学年部会）における指導・助言

三重県教育委員会事務局学力向上アドバイザーを招聘し、研修を行った。学習支援サポーターや少人数加配教員を配置し、複数体制で算数の授業を行っているという協力校の実態により、指導効果をあげるためのTT指導に特化した研修を行い、以下のような指導・助言をいただいた。

#### a 導入、課題提示の場面

- ・複数教員での劇化等による課題の提示。
- ・複数教員による違う考え方や疑問点の提示。

#### b 展開場面

##### ○T1、T2の分担

- ・授業の前後半でT1、T2の役割を交代する。
- ・単元、時間によってT1、T2の役割を交代する。

##### ○発問等作業分担

- ・T1は児童の興味関心を高める発問に集中し、T2はそのほかの作業を行う。例えば、机間指導による支援や個々の理解状況の把握、資料等の配付、視聴覚機器の操作、板書、説明補足等。

##### ○机間指導時の分担

- ・左右、前後、列、班を決めて分担し、机間指導を行う。

- ・ T1 は支援の必要な児童への指導を行い、T2 は発展学習をする児童への指導を行う。
- ・ 机間指導の際は、座席表を用い、児童の活動の様子を書き込んでいく。

○全体交流の場面

- ・ T1 から指名されなかった児童の考え方を T2 が拾い上げ、発言するように促す。
- ・ 自力解決時の児童の様子を T1、T2 で共有し、T1 の意図的な指名に生かす。
- ・ T1 は全体指導を行い、T2 は重点的な個別指導を行う。

c まとめの場面

- ・ T1 は一斉指導により授業のまとめを行う。T2 はまとめを板書する。
- ・ T1 による授業のまとめの際に、T2 はつまずきのある児童への個別指導を行う。

②提案授業指導案検討会（5年算数科「単位量あたりの大きさ『比べ方を考えよう（1）』」）における指導・助言

a タイムマネジメントを確実に行う

45分で授業を完結できるよう、指導案に「つかむ・見通す〇分」「考える〇分」「伝え合う〇分」「まとめる〇分」等、目安となる時間を入れていくとよい。

b 3人体制で授業を行うことのメリットを前面に押し出す

本時は担任（以下、T1）少人数加配教員（以下、T2）、学習支援サポーターの3人体制で授業を行うこととなる。T1の一斉指導の後、3グループに分かれ、本時で焦点化させたい3つの考え方についてそれぞれのグループで考える。T1、T2、学習支援サポーターがそれぞれのグループに入り、グループ別にミニ授業を行い、全体交流につなげるといったことが本授業の重点である。全体指導の場ではうまく発言できない児童が、グループでは発言できるような手立てを考えなければいけない。また、全体交流の場ではそれぞれのグループでつかんだ児童の考えを、グループの担当者が意図的に指名し発言させたり、時には補足したり、また児童に補足させたりしながら進めていくとよい。

③提案授業（5年算数科「単位量あたりの大きさ『比べ方を考えよう（1）』」）における指導・助言

文部科学省の調査官に授業を参観していただき、以下のような指導・助言を受けた。

- a 単元全体計画の中に評価の観点を入れる。「どんなことがわかったか」「どんなふうになるとよかったのか」等を明確にしておく必要がある。
- b めあてが問いになっていないといけない。「Let's」ではなく「Question」でめあてを作っていく。
- c 発表者ではなく、聞き手に重点をおく。「友だちの発言内容を理解しているか」「聞いているふりをしていないか」等を常に意識する。
- d 必ずノートに意見をまとめる。そして、話すということを積み重ねていく。
- e 「すごいな」「よくきいていたね」といった言葉がけにより、子どもたちの意欲を高める。算数の授業を通して学級経営を行うという視点を持つ。

④全体提案授業指導案検討会及び全体提案授業（2年生国語科「しかけカードの作り方」「おもちゃの作り方」）における指導・助言

これまでの国語科の研究をさらに充実させていくために、国語科においても全体提案授業を行い、以下のような指導・助言を行った。



a 指導案検討会

- 単元における指導事項を明確にすること。
- この授業で子どもに考えさせたいことは何かを考え、めあてを作ること。
- 本時の評価は、目標とリンクさせること。
- 視点児童に対する具体的な支援を明記すること。
- タイムマネジメントを意識すること。

b 全体提案授業

- 指導事項をきちんと落とし込んだ授業展開がなされていた。
- 目的意識を持って常に焦点を絞りながら進めていくことができるような工夫がされていた。子どもたちが常にめあてに立ちもどって考えるような学習スタイルが確立されている。
- 根拠をはっきりさせながら進めていこうとする雰囲気ができている。
- 個々の先生方の取組については、学級の実態に合うよう随所に工夫がされており、提案性のあるものばかりである。今後は、学校全体で組織的に取り組むといった視点を大事にし、系統性を持たせて指導を行っていくことに重点を置くとよい。

⑤志摩市学力向上検討委員会の開催

本市の子どもたちの学力および学習状況を把握・分析し、学力向上のために具体策を検討することを目指して本年度も年間4回開催した。活動内容は、以下のとおりである。

- a 全国学調における児童・生徒の解答用紙のコピーをもとに、現状と課題の確認  
(4月下旬)
- b 全国学調結果の分析と今後の授業改善についての研修(8月下旬)
- c 授業改善の取組状況の交流(10月中旬)
- d 本年度の振り返り(2月上旬)

協力校の取組状況については、各回において報告し、市内の教職員で情報を共有した。

⑥授業研究指定校事業

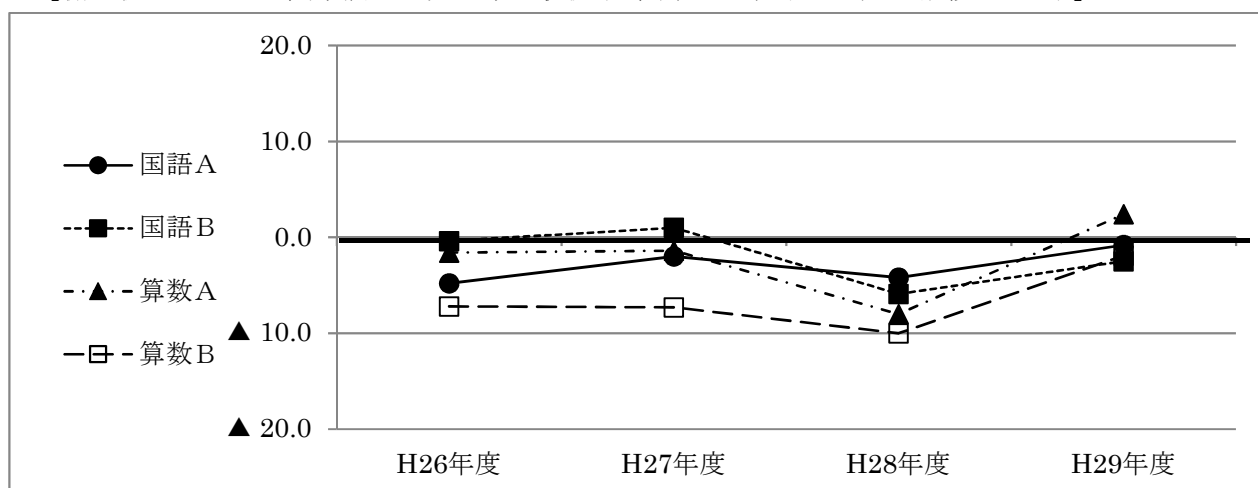
本市では、授業において知識・技能を活用できる力を育成する指導力を身につけさせることを目指して、授業を中心とした実践的な研修を進めている。学校を指定し、2年間という期間を設けて一定の研究に取り組み、その成果を発表するものである。小学校については、算数、国語に教科を絞っている。本年度も3校が発表を行った。公開授業のあとは、分科会を持ち、協議を行った。討議の中心となるものは、以下の3点である。

- a 効果的なめあての提示や振り返りのあり方
- b 学び合いのあり方
- c タイムマネジメント

会での学びは、自校の校内研修等で還流報告を行うことで全教職員に共有される。協力校においても校内研修で、市内発表校の実践事例を参考に導入の工夫、めあての提示の仕方等について協議を行った。

### 3. 実践研究の成果の把握・検証

【協力校における全国学調から見る学力状況(全国平均正答率との差の推移グラフ)】



本年度の全国学調結果から見ると6年生においては伸びが見られ、全国平均との差は縮まった。特に算数A問題については、昨年度に比べ11.4ポイントの伸びが見られた。また、市内の課題とされている国語B問題についても4年間で全国平均との差はほとんどない。

活用力を見る問題についての出題がほとんどであるみえスタディ・チェックにおいても、国語科については、県平均を上回っている。

算数科においては、昨年度より取り組んできたきめ細かな指導や基礎基本の力をつける取組の成果が現れたといえる。学校全体で朝の学習のあり方についての見直しを図ったことも、大きな要因であると考えられる。朝の学習においては、週3日間は教科の補充学習を行う。担任がプリント等を準備し、指導のもと時間をきめて行う。解答作業や解説もその場で行う。10分程度の取組であるが、継続的に行っていくことで習慣化し、1限目の授業への移行もスムーズに行われた。

国語科については、協力校が市の指定を受け、平成26年度より国語科の説明文における言語活動について研究を進めてきたことが大きな要因と考えられる。

### 4. 今後の課題

「知識・技能を活用する力を育成する授業づくり」を研究課題とし、協力校とともに取組を進めてきたことから見えてきたことは、「組織的で継続的な取組の効果」ということである。協力校において、朝の学習のあり方を見直し、学校全体で取り組んだこと、継続的に国語科の研究に取り組んできたことが一定の成果につながったと分析できる。

日々の算数科の授業の中で「活用力をつける力の育成」に向けては、「①効果的なめあてや振り返りのあり方、②学び合いのあり方、③45分で授業を完結するためのタイムマネジメント」について常に検証しながらすすめていく必要がある。この点については、本事業を受けるにあたり、提案授業の際に調査官からご指導いただいたことと重なる。

また今回、学習支援サポーターの配置が4、5年生だけであったため、算数科の指導についての研修が4、5年生のTT指導に特化したものになる傾向があり、多学年へのきめ細かな情報共有がなされなかったことも課題としてあげられる。算数科の授業改善に向けて、2年間で取り組んだことを再度学校全体で共有するとともに、継続して行っていく必要がある。今後も提案授業をもとに、学校全体で討議の柱を明確にしながら、その進捗状況を確認していかなければならない。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の  
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	三重県	番号	24
-------	-----	----	----

協力校名	三重県志摩市立神明小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

本校では、昨年度から本事業を受け、授業では、子どもたちに1時間の見通しを持たせ、主体的に学習を進めて行くことができるよう「めあて」を提示し、それに沿って学習を進めている。また、国語科では、説明的な文章の授業を通して子どもたちの表現力を培うことを目指し、算数科では、基礎基本の定着や自分の考えを持ち発表することを目指して授業改善を行い、一定の成果が確認された。しかしながら、「自分の考えを伝えたり、書いたりする力が弱いこと」「既習事項が定着していないこと」「家庭学習（予習、復習）の習慣が定着していないこと」について、まだまだ課題があることが明らかになってきた。

2. 協力校としての取組状況

これまでの国語科の研究をさらに充実させることを中心とし、算数科については、学習支援サポーター等との連携を図り、昨年度に引き続き個に応じたきめ細かな指導を行っていくことにより学力の定着を図っている。

算数科における具体的な取組内容は以下のとおりである。

(1) 児童の実態把握について

- ・単元に入る前に、レディネステストやアンケートを実施し、個々の理解の状況や関心意欲を把握する。
- ・日常の授業における児童の観察（学習態度・発表・ノートなど）を大切にし、記録する。
- ・毎時間のめあてに対する個々の理解度や満足度を知る。
- ・単元末や学期末にペーパーテストを行い、個々の習熟や課題を把握する。
- ・学期末に算数に関するアンケートを行い、児童の変容を知る。
- ・単元テスト等の誤答分析を行う。

(2) 効果的な学習集団編制について

- ・少人数での話す（説明する）活動をより充実させ、豊かな表現力につなげていく。
- ・子どもたちの豊かな発想や考える力を大切に、子どもたち同士が試行錯誤しながら共に学ぶ学習過程やペアやグループでの話し合い活動を充実させる。

(3) 補足的な学習、発展的な学習について

- ・全国学調、みえスタディ・チェック、ワークシート（3点セット）を、年間を通して授業や朝学、家庭学習において計画的に活用していく。
- ・つまずきのある児童の学習集団においては、必要に応じて、2学年前からの既習学習の学

び直しや反復練習などによる補充的な指導を行う。

- ・更に学習を進めていきたい児童には、発展的な課題を用意して学習意欲を高めるような支援を行う。

#### (4) 指導の工夫について

- ・視覚的支援の充実を図る。
- ・みえスタディ・チェック等の分析から明らかとなった課題のある領域等については、繰り返し反復練習を行う。
- ・自分の考えを書いてまとめる活動に慣れさせ、書く力を高めるためにノート指導を充実させる。

#### (5) 評価について

- ・毎時間行う振り返りから、児童の満足度、学習内容の定着状況、学習意欲等を把握し指導方法を検証する。
- ・評価内容を共有し、指導改善を行うため、担当者間の連携を密にする。

算数科における以上のような取組の成果と課題については、志摩市学力向上検討委員会とも連携のうえ、市内の小中学校に向けて公開授業研究等による情報発信を行う。また、国語科における授業改善の取組は、校内研修のさらなる充実を図るとともに、中学校区を中心に公開授業を行ったり、志摩市学力向上検討委員会で情報発信をしたりすることを通して、取組の成果について共有する。

### 3. 取組の成果の把握・検証

#### (1) 児童の実態把握について

レディネステストやアンケートを実施した結果、時間の経過とともに学習内容の理解が曖昧になっている児童が多いことがわかった。そのため、日常の授業における児童の観察（学習態度・発表・ノートなど）をこまめに行い、児童の理解状況を記録していくようにした。その記録とレディネステストやアンケートの結果をもとに、単元の途中でも児童の実態に応じて補充学習を取り入れ、児童の学習内容に対する理解をさらに深めることができた。

複数体制で指導にあたることで、児童のつまずきや間違いやすい傾向を早期に把握できた。また、毎時間のめあてに対する個々の理解度や満足度を把握したり、単元の終わりや学期末にペーパーテストを行い、個々の習熟度や課題を把握したりすることで、児童一人一人に応じた支援を考え、次の授業にいかしていくことができた。

#### (2) 効果的な学習集団編制について

校内研修において「伝え合う力」を育むことを掲げ、ペア学習やグループ学習等の少人数での話す（説明する）活動をより多く取り入れたことで、全体での発表が苦手だった児童が自分の考えを発表する姿が多く見られるようになった。少人数の中での発表体験の積み重ねにより、学級、学校全体の場でも、積極的に発表しようとする児童が増えてきた。

#### (3) 指導の工夫について

少人数加配教員や学習支援サポーターを活用したことで、TT指導や習熟度別指導を充実させることができた。また、習熟度別にグループを分けるときには、児童自身が所属グループを決

める形にしたことで、意欲的に学習に取り組む児童が増えてきた。

年度当初より2学期末の方が算数の各観点の到達度が数ポイント上がった児童が数人いた。また、5年生では単元によっては、到達度が数十ポイント上がった児童が数人いた。5年生では、算数の知識理解の到達度（市販のテスト）で、1学期は86%だったものが2学期には91%に上昇した。4年生では、2学期の知識・理解、技能の観点において、学級平均85点以上を達成することができた。2学期は、平均や面積の求め方など、公式が多数出題される中、基本になる知識・理解の数値があがったことは、日々の積み重ねの成果だと考える。これらの結果からも、TT指導や習熟度別指導が、子どもたちの理解や学習内容の定着に有効であると言える。

視覚的支援の充実を図るため、拡大図を準備したり、具体物を用意し操作させたりすることで、イメージを持たせ理解を深めることができた。また、机間指導の際に、教師がホワイトボード等を使って視覚的な支援を行ったことで、以前と比較してより多くの児童がより深く理解できるようになってきた。

#### (4) 補充的な学習、発展的な学習について

朝の学習の時間に、全校で前学年までの既習事項の学び直しや反復練習等補充的な指導を行ったことで、基礎基本の定着に効果があった。また、短時間で学習に取り組む習慣が付き、それが授業の中でも生かされてきている。

全国学調、みえスタディ・チェックの採点を全教職員ですることにより、児童の成果と課題を学校全体で把握することができた。また、自校の強み、弱みについても校内研修で交流し、学校としての課題を把握することができたことで、各学年における学習の積み重ねが重要であることを再認識することができた。「三重の学-Viva!!セット」も授業や宿題で活用し繰り返し反復練習をしたことで、課題である文章問題や計算の工夫、条件に合わせて指定された文字数で答える問題等については、問題の意図について理解しより短い時間で解答できるようになってきた。

#### (5) 評価について

ノートの点検や練習問題の解答状況の把握を確実にを行い、毎時間行う振り返りから、児童の満足度が向上していることがわかった。複数の担当者が指導にあたることで児童のつまづきを早い段階で把握し、きめ細かい指導ができたことで、学習内容の定着により効果が見られた。また、休み時間にも担当間で情報を共有し、指導方法や評価について具体的に検討して指導の改善に取り組むことができた。

以上のような取組を行った結果、H29年度の全国学調では、算数Aの平均正答率については全国の平均正答率を上回ることができた。算数Bについ

H29 全国学調結果	算数 A	算数 B
神明小	81	44
全 国	78.6	45.9
全国との差	+2.4	-1.9

ては全国の平均正答率を下回ったものの、-1.9ポイントとその差を前年度より大幅に縮小することができた。

毎学期末に実施している児童学校生活アンケートでは、1学期には「算数の勉強がよくわかる」という項目で全校の5.7%の児童が「そう思わない」と答えていたが、2学期には2.6%に減少している。

授業終わりに、「先生、答えはあつとるんやけど、この式はたまたまなのか、ちゃんとあつているのか知りたい。」と聞きに來たり、休み時間に「ぼくは、こう考えた。」「先生、このときはどうなるの?」「じゃあこんなときはどう求めるの?だったら、これも求めることができるよね。」など児童の算数に関する会話が增えたりしたことからも、学習意欲が向上してきたことがわかる。

保護者アンケートでは、「今まで、算数がわからない、きらいと話していたのに、5年生になって得意だと言いだめたことがうれしい。」「宿題では、わからないと聞きにくることが減って、心配していたが、テストを見るとできているので、できるようになったんだと感じた。」「今まで、宿題をしていないことが多かったが、今では当たり前のようにしている。」といった意見が複数の保護者から聞かれるようになった。

#### 4. 今後の課題

これまでの取組により、全国学調やみえスタディ・チェックの結果から、子どもたちの学力向上においては一定の成果をおさめてきたと言える。また、子どもたちや保護者のアンケートの結果から、子どもたちの達成感や学習意欲の面においても一定の向上を示している。

しかしながら、全国平均や県平均と比較すると、まだまだ向上する余地を残していると言える。子どもたちの学力をさらに向上させていくために、次年度は次の項目を重点として取り組んでいきたい。

##### (1) よりわかる授業を目指したさらなる授業改善の取組

- ・TTが運用できない状況でも子どもたちの学力を向上させていくための指導の研究や実践。

##### (2) 子どもたちの学習意欲をさらに向上させていくこと

- ・「わかる」 → 「楽しい」 → 「もっとがんばろう」 → 「わかる」のサイクルを大切にする。
- ・達成感 → 自己有用感 → 自己肯定感 へと高める。

##### (3) 子どもたちの学習習慣をさらに定着させていくこと

- ・学習習慣を支える生活習慣の定着。  
(早寝早起き朝ご飯、テレビやゲームの時間、スマホやパソコンを使う時間・ルールなど)
- ・読書習慣の定着。
- ・家庭や保護者とのよりよい連携による学習習慣及び読書習慣の定着。